

---

# 迷物語

楓麟

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

迷物語

### 【Nコード】

N1183P

### 【作者名】

楓麟

### 【あらすじ】

題名どおり、八九寺ちゃんの二次創作です。短編予定と言ってもおきながら結構長くなってしまい…。オチはきつとありません。それでもきつといいお話。傾物語直前で、彼女に対する小さな愛が急成長して、ついに書き上げてしまいました。更新不定期ですが、よろしく願います。

イラスト描いてみました<http://1617.mitemin.net/i16142/>

## まよいメモリー 其の壹

001

八九寺真宵<sup>はちくじまよい</sup>、つまるところわたしがわたし自身について何かを物語るというのは、仮にもそんなことがあったとしても、簡単そうであって簡単にできるものではないでしょう。

なぜなら。

わたしの物語は、捉えようによっては、もう既に終わっていると言っても、あながち間違っではないからです。

わたしは、もう死んでいます。

わたしは、既に死んでいます。

数十年前に、昔々の事故で、わたしという存在は一生を終えているのです。

それでも今もなお、こうして存在はしているのですが。

もし、人が、わたしの物語は存在すると定義するならば——いえ、それはそれで、語るのは難しい。

わたしは、少し前まで、『迷い牛<sup>かいい</sup>』でした。  
ぐるぐる渦巻く——怪異<sup>かいい</sup>でした。

そして、過去形を使用したことから分かりますように、わたしは、もう既に迷い牛でもありません。

紆余曲折あつて、今のわたしは、浮遊霊です。

普通の少女から、地縛霊へ、そして浮遊霊へと。  
そのどれもが、やっぱりわたしで。

でもどれもが、違うわたしで。

何も変わらなくても。

化わってしまっています。

これからも、わたしは違うわたしになるのかもしれませんが。  
憑依型の幽霊になるかもしれません。

ポルターガイストになるかもしれません。

キヨンシーになるかもしれません。

それでも、やっぱりそれはどれもわたしであることは、否定できないのです。

困ったことに、わたしにもよくわからないことに、全てがわたし。わたしとは、何なのか。

全く——わかりません。

それでも、これ以上考えると恐ろしいものが待っている気がするので、とりあえず今回はここまでで考えるのをやめますが——

話は、続きます。

もしこんなわたしを、ひとりの人間と言ってくれるのなら。

まだ、わたしの物語は完結していません。

みんなの知らない物語は、まだまだ続くのです。

まだ、まだ。

この物語は、生きている間も、死んでも、迷いに迷ったわたしの、今もなお迷い続けるわたしの、物語。

ただ迷うだけ。

そして、そんなわたしを導いてくれた、これからも変わらずそうしてくださるでしょう、わたしの恩人で変態で悪友の元吸血鬼さんとの、大事な思い出。

一生忘れない、ではなく。

もう此処にも、何処にもいないわたしが言うなら、死んでもずっと、忘れない、記憶。

新しく刻まれた、わたしの大切な記憶です。

さあ、もしかしたら言いそびれてしまいそうなので、今のうちに、言っておきましょう。

元吸血鬼さん。

もとい、阿良々木さん。

阿良々木暦——さん。

わたしは、あなたに感謝しています。

わたし——八九寺真宵は、あなたのことが  
大好きですよ。

## まよいメモリー 其の貳

002

あまりに脈絡みやくわくのない展開なので申し訳ない限りですが、どうやら拉致らっちされてしまったようです。

夏休みももう終わりに差し掛かったある日のこと——わたしは、クーラーの効いた涼しい部屋の、ベッドで寝ていました。随分ずいぶん長い間意識いしきを失っていた気がしますから、ひよっとしたら何日も眠っていたのかもしれませんが。わたしは、空腹を感じる体ではもうありませんから、そこらへんはわかりません。この部屋に幾つもある時計を見るに、正午を回った頃でしたが、それがわかったところで、わたしには何の意味も成さないので。そもそもわたしが気を失ったのが何日であるか記憶していませんので、たとえ携帯電話を所有していたとしても、同じく意味はないでしょう。ただ、随分場所違いなことを言いますが、夏真っ盛りだからこそ、ここは快適な場所でした。別に体を縛られているわけでもないのに、逃げることも容易いのですが、今のわたしはそれよりも現状を把握したいので、動かずにその場で考え続けることにします。落ち着こうと、手足を伸ばす。こんな場所で——阿良々木さんは、生活しているんですね。

暢気のんきにも、わたしはそんなことを考えました。

そう、わたしが今現在いるこの場所は、馴染なじみも深い、あの凶悪で醜悪なロリコンで有名、阿良々木暦さんの部屋なのでした。

なぜ私が彼の部屋とわかったかと言えば、それは匂いに決まっています。

これは阿良々木さんの匂い。

阿良々木臭で充満しているのです。

わたし、八九寺真宵の五感や第六感は、優れているのですっ。ちなみにちなみに、これは二度目の拉致なんですけどねっ。

もう立派な犯罪者です。

綺麗と言つか、気持ちの悪いくらい片付いた部屋の、ベッドに、わたしは寝かされていたのでした。

そして、当の阿良々木さんはいらっしやらない。

それは……どうということなんでしょう。

もしかして、ベッドの下に阿良々木さんが、とかっ！

というか、阿良々木さんがベッドだったとかっ！

そんなわたしの貞操の危機、みたいな展開ではもちろんありませんでした。

そうなたら訴えますけどっ！

わたしはちゃんと普通のベッドに寝ていましたし、誰もベッドの下にもいなければ、天井に張り付いていることもありませんでした。と、そこで——わたしはようやく自分の異変に気がつきます。

自分というべきかはさておいて、わたしのリュックが、消えているのです。

きよろきよろ辺りを見回しても、わたしの大切なリュックの姿はどこにもありません。これは阿良々木さんがいないこととは違って、とても大変なことです。

あれがなかったら、わたしは蝸牛ではなく蛞蝓なめくじになってしまいますっ！

ではなくて。

それでも、リュックなしではわたしは帰るに帰れません……。一体どうしたものでしょうかと。

静かな足音がして、部屋のドアが静かに開きました。

現れたのは、可愛い小柄な女の子で（わたしがこう言うのも変ですが）、長い黒髪を結びもせず、そして何より印象的なのは、和服姿ということでした。

この人が、噂の阿良々木さんの妹さん、阿良々木家次女の阿良々木月火つきひさんなのでしょう。とっても可愛いですっ。垂れ目がキュー

トですつ。

でも、ややまずいですね。

わたしが男子高校生のベッドで、寝かされている図というのは、中学生女子でなくても、妹でなくても、シヨックを飛び越え呆然とすることも忘れるでしょう。噂では、ピーキーで攻撃的な月火さんのことです、殺意を覚えてわたしに襲い掛かってくるかもしれません。

まあ、わたしが死ぬ心配はないのですが。

八九寺真宵は永久に不滅なのです。

「んー」

不思議そうな顔をして、月火さんとわたしは一瞬目が合いました。

「お兄ちゃん、どこ行っただろー。さっき帰ってきたと思ったらまた出て行っただんだね。死んじやえばいいのに」

さらっとひどいと言いますねー。

可愛い顔のまま、その上阿良々木さんそっくりの顔で言われるとしゃっくりしちゃいます。

どうやらどうやら、彼女にはわたしが見えないようです……まあ、わたしは阿良々木さんと羽川さん限定に見えるフェアリーというわけではありませんので、運が悪ければ月火さんにもわたしは見ていたのですが、今回は、そうはならなかったようです。

わたしにも、わたしが見える人と見えない人の違いはわからないのです。わかるかもしれませんが、少なくともわたしは言えません。訊くなら作者に訊いて下さいっ！

「もー。まったくもー。どこ行っちゃったのさあーっ」

ぷりぷりしながら、月火さんは出て行ってしまいました。

……。

この後の展開は、もうわたしにはわかつちゃってるんですが……。

八九寺Pでなくとも、誰でもわかると思いますが……。

わたしは知っています。

ファイヤーシスターズなる、例の姉妹がどれだけリンクしているかということ……。

「兄ちゃんつ。あれっ、いねーぞ、こりゃ。どうしたこつたい。

もぬけの殻だぜ！　んー、どーしよっかなー。これはアレだな、エロ本探しするっきゃねーな！　兄の趣味を把握するのが妹の使命だっ！」

勢いよく部屋に飛び込んできたのは、阿良々木家長女、噂の阿良々木火憐<sup>かれん</sup>さんでした。

ざしゃーつとスライディングを決めながら（ジャージがさまになつてますっ）、阿良々木さんの机の引き出しを勢いよく開ける火憐さん。

「んーんー。やっぱねーなあ。いつもどこに隠してんだあの兄貴。まあ、あたしはエロ本は兄ちゃんの部屋に隠してるから、ぜってーにばねーんだけどなー」

何気にすごいこと言いました！

<sup>きょうだい</sup>兄妹つてすごいです、怖いですっ。

しばらく部屋中を詮索する火憐さんでしたが、なにも収穫がなく諦めて伸びをしました。

大きいです。

阿良々木さんが妹を見上げる図が、今なら容易に想像できます。

「しゃーねーなあ。んじゃっ、今回はこうしよう。兄ちゃんのベッドに飛び込んで、寝汗を——って、うおおおおっ！！？」

オーバーリアクションで仰け反る火憐さん。

ばっつちり目があいました。

これは。

これは。

「あんだ、誰だっ？」  
見えてます！

## まよいメモリー 其の貳（後書き）

ひとつひとつも短めです。

真宵ちゃんの語りはどうかかわかりませんが、あくまで私のイメージです。

## まよいメモリー 其の参

003

「待て待て待て。落ち着けあたし。こんなところにベリーキューテイクルな女の子がいるからって、興奮してんじゃねーよ。まずは深呼吸だ。すーはー。すーはー。よし、目を閉じて、もっかいよく見てみよう。ここはあたしのうちで、兄ちゃんの部屋だ。そして目の前には、やつぱり、やつぱり……女の子がっ……！」

テンション上がってますねー。

ところでキューテイクルってどういう意味ですか？

「つてえ！ これはまずくねーか？ 兄ちゃんの部屋に？ なんてっ？ ヤバくね？ どーゆーことだ？ しかもベッドにつ！ 兄ちゃんのベッドで寝ていいのは兄ちゃん和あたしだけなのにつ。あと特別枠で翼さんつばさと戦場ヶ原さんせんじょうがはらもだけどっ！ ええ。えええーっ！ ちよつと、あんた誰なんだよ！」

散々叫んだ拳句、やつとわたしに訊いてきました。

深呼吸の意味がまったくありません。

火憐さんはびっ、とわたしを指差して声を太くして訊いて来ました。

「何者か！ ぬしは一体何者かと訊いている！」  
変なキャラになってます……。

こっ、ここは、よよと泣きながら、「ああ、どうかわたくしめを助けてくださいまし」とか言うべきなんでしょうか……いえいえ、まさかまさか。

お忘れではないでしょうが、わたし、すっごい人見知りなんですよ。

しかし、何も答えないと言うのは失礼です。

「え、えと」

さて、どう言えばいいものか。

この火憐さん、随分とロリで変態さん、もとい阿良々木暦さんのことをリスペクトしているようですが、わたしがどういった経緯でここに至っているのかを逐一説明したら一体どうなっちゃうんでしょうか。

少なくとも阿良々木さんの命はないような気がします。少なくとも、というのはおかしいですが。

「わたしは、八九寺真宵です。わたしは、八九寺真宵といいます」とりあえず名乗ります。

こちらだけが相手の名前を把握しているというのも申し訳ありません。

「阿良々木さんは、わたしの、恩人です」

こう言っておきました。

困ったことに、これも事実なのです。

母の日、それが阿良々木さんとのファーストコンタクトであり、ファーストタッチでありました。

自ら怪異の身となり、どこにも辿り着けなくなっていたわたしを、あらゆる手段で助けようとしてくれ、そして、助けてくださいました。

わたしは、わたしの目的を果たし、開放され、そして、戻ってきました。

以来わたしは。

ずっと彼に付けまとわされており。

.....。

日に日に阿良々木さんのロリコン性が濃くなる上、明らかになっ

ていくのを体で感じているわたしとしては、残念というか、怨念と  
いうか、観念してなかったことですが。

打ち切りとかなったらどうしてくれるんです。

よくここまで生きてこれたものですと逆に感心してしまいます。

他人事たにじみたいですが。

もうわたしはとづくにセクハラ行為には慣れてしまいましたけれ  
ど（って、これは危なくないですか？）、周りの目が痛いです。

もしかしたらわたしが先に規制されてしまうかもしれません。

はあ。つらい人生ですねえ。  
と。

話が逸れてしまいましたが。

今、わたしの選択できるコマンドは『話す』『噛む』『現実逃避  
をする』しかないんです。

阿良々木さんでもあるまいし『噛む』なんか選択できるわけがあ  
りません。ゆえに『現実逃避』をしていました。

一方の火憐さんは話を勝手に進めていました。

「阿良々木さん？ あたし、あんたを助けたこととかあったっけ？  
そーかそーか。まああたしのことだからな。無意識のうちに敵さ  
んをやつつけて、救い出しちゃったのかもしれない。あはははは  
は」

「えと……阿良々木、暦さんの方です」

どうしたらそんな勘違いができるんですか。

記憶にないことを信じないで下さいよ。

しかも一人で勝手に！

これは本当に、阿良々木さんよりも馬鹿なのかもしれません……。  
馬鹿、というよりは頭が残念です。

エロ本探しとか、小中学生男子間で発生するイベントのはずです  
し（今もそうなんですかね？）。

あれは本気で探してましたしね……。

「あ？ 暦ってだれだ？」

「兄の存在を忘れています……」

「ああ、兄ちゃん。そんな生物もいたな。ここはその部屋だった  
っけな。ああ、そうか。兄ちゃんの知り合いなんだな」

「どれだけ自分の利益にしたかったのでしょうか……兄を忘れるレベ  
ルとは。」

「ノリなのかマジなのか皆目わかりません。」

「いやあ、ゴメンゴメン。あたしてつきり、敵から受けた攻撃のシ  
ョックで、記憶喪失になっちまったのかと勘違いしてたよ。だか  
らあんたのことを覚えてなかったんじゃないかねえかってな」

「壮絶な物語まで展開されていたようです……」。

「ていうか何やってるんですか。」

「で、兄ちゃんはあるたを置きっぱでどっか行っちゃったのかよ。  
それともあんた、どこ行ったか知ってるか？」

「いえ」

すると火憐さんは顔をしかめ、うーん、と唸りました。

「なあ、ところであんた、名前なんだっけ」

「八九寺真宵です」

「ん、それは、わかるんだけどさ。どこで名前切れるわけ？ 宵？」

「真宵です……」

「そんなところからわからないんですかつ。」

「困っちゃいます。」

「ああ、そうそう真宵ちゃん。あたしは阿良々木火憐だぜ。カレン  
ダーじゃねーんだぜ」

「……」

そういえば映像化の次回予告で火憐さんが言っていた「火憐だぜ！」の台詞で知った衝撃的な事実……あれは本当にびっくりでしたねえ。

何のことかって？

暦、月火、火憐の名前の由来ですよ。

御両親は何をお思いになって名前をお付けになったのでしょうか。

「そしてあたしはファイヤーシスターズの実戦担当！ もうひとりちっこい妹がいるんだけど、そいつは参謀担当の……まあ、あとで紹介するよ」

「……………」

それはやめてください、とわたしに言えるはずもなく。

「とにかく、こうして知り合えたんだ。よろしくな」

こうして知り合ったのも、何かの縁……というか、阿良々木さんのセクハラによる縁なのですが、火憐さんと出会えたことは嬉しいことです。

すっ、と差し出された火憐さんの綺麗な手を、わたしはそつと握りました。

そうして握手。

これが、阿良々木火憐さんとのファーストタッチ……いえ、ファーストコンタクトでした。

## まよいメモリー 其の肆

004

「真宵ちゃん真宵ちゃん。兄ちゃんがくるまで暇だったら、よかったらあたしと遊ぼうぜ!」

火憐さんはそう提案してきました。

確かに阿良々木さんが来るまで何もしないというのは暇です。

「遊び……ですか」

「うん。丁度持ってきてる」

そういえば、火憐さんがこの部屋に飛び込んできた際、手ぶらではありませんでしたね……。何をするつもりでしょう。

わたしはベッドからおりて、火憐さんの手にある物を見ます。

「じゃーん。本当は兄ちゃんとするつもりだったんだけど、まあいいさ。真宵ちゃんもやってみねーか」

「……………」

「ん? どうした?」

「……………」

「おいおい、固まってんぞ。どうした?」

ぺちぺちとわたしの頭を軽く叩く火憐さん。

いやあ、だつて……。

「火憐さん」

「なんだい真宵ちゃん」

「それ、歯ブラシでしょう?」

そう。

火憐さんの手にあったのは、歯ブラシでした。  
何だか、とっても危険なおいがします……。

「もちろん、歯ブラシ以外の何物でもないぜ。あつ、そうか。真宵ちゃん、安心しろよ。別にこれは尻に突き立てるわけじゃねーし、むしろ突き立てるならあたしの尻に突き立ててくれてかまわないから」

ああ。

思い出しました。

火憐さんは、とてつもないドMさんなのでした。

後ずさりしたい気持ちを必死に堪えながら、わたしは愛想笑いを  
つくります。

へけっ。

おや、これはあるハムスターの口癖でしたっ。

「では、その歯ブラシをどうすると言うのでしょうか、火憐さん……  
わたし、それは歯を磨くためのものであるとしか思えないんですが、  
それが一体どうして遊びになるのでしょうか」

「いや。真宵ちゃんは賢いな。もう自分で答えを出しちゃってんぜ。  
そう。この歯ブラシは歯を磨くためにのみ存在しているのさ——相  
手の歯をなっ！」

目には目薬、歯には歯ブラシ。

当たり前ですけど、どこか思考がズレちゃって大変なことになっ  
てます、火憐さん。

につこりと笑う火憐さんを凝視して、わたしは続きを促します。

「いやさ、だから、その……真宵ちゃんの歯、あたしが、あたしが  
っ……」

「断固拒否しますっ！」

初対面ですることではありません！

それにそもそも歯ブラシを持っているという展開は想定外です！  
それでも懲りない火憐さんは、

「いや！　じゃあ、あたしの歯を磨いてくれよ、それで妥協しよう」  
「そのどことが妥協してるんですか」

兄が兄だから、妹もこんな風なんでしょうね。  
何だかシヨックです……。

「それとも真宵ちゃんは電子歯ブラシ派なのか？　だったら親のでいいならあるけど——」

「違いますよっ！」

「一石二鳥じゃん。一挙両得じゃん。歯を磨ける楽しい遊びなんだから」

「いえいえ虻蜂取らずですよ。一挙両損ですよ」

それに何だか、歯を磨かれるというのは小さい頃に帰ったみたいで、とても恥ずかしいです。

小さい頃。

お父さんや、お母さんにしてもらったのを思い出して。

お二人が喧嘩しなかった頃を思い出して。

「あー、まあ確かに、初めての人とするもんじゃねーよな。ごめん、ノリで言っちゃった」

「……」

「真宵ちゃんの歯が綺麗だったからさ」

「……ありがとうございます」

「磨いちゃいたいくらい綺麗な歯並びだったからさ」

「どんな褒め言葉ですか」

まったくもう。

普通の遊びを知らないんですか。

「普通の遊び、ねえ。これも十分普通だと思うけど……いや、これ兄ちゃんの歯ブラシだからそうでもないかもな」

ぽーん、とそれを放り投げて火憐さんは呟きました。

何ということ……。

歯ブラシを投げたことに対してではなく、それをわたしに行使しようとした火憐さんに対してです。

「遊びと言いましてもねえ。そういえば、阿良々木さんは花札が大好きでしたねえ」

途端に、顔をしかめる火憐さん。

おや？

ああ、しまいました。

じゃなくて、しまった。

火憐さんはきつと、今日わたしが阿良々木さんに助けてもらったと思っっているのでしょう。

そのわたしが、しみじみと思い出したように「花札が好きでしたね」という発言をしたものですから、何か変だと思ったのでしょうか。

「ど、どうかなさいましたか」

「んにゃ、あたし、花札とかそういう頭使う系無理なんだよね」

「はあ」

そういうわけではないようでした。

ちよつと疎すぎませんか。

「兄ちゃんも月火ちゃんも、女の子がするような遊びばかりやがってさあ。お人形遊びとか、あたし無理だし、折り紙とかあやとりとかは千切っちゃうし、性にあわねーんだよねー」

「で、では花札はパスで」

そもそも、花札をしようにもできないのです。

阿良々木さんの部屋を詮索していいのなら——いえ、やはりわた

しとしてはとてもしたくありません……。  
ふむ。

今更気づいたのですが、わたし、とてもいい感じに火憐さんと会話できてませんか？

やはり阿良々木さんとそっくりだからでしょうか。

目はやや吊り目で、髪は阿良々木さんよりも短いし、背は阿良々木さんより遥かに高いですが、それでも。

かおかたち  
顔貌がそっくりです。

月火さんも同じで、目はやや垂れ目で、髪は阿良々木さんより長く、背は阿良々木さんよりも低いですが、とても似ていました。

「いつ兄ちゃんが帰ってくるかわかんねーし、外で遊ぶわけにもいかねーよなー」

「そうですね」

「部屋ドツチするか！」

「ここですか！？」

危険過ぎます！

「部屋相撲とか」

「わたし、絶対に負けてしまいます……」

「じゃー、これは平等に遊べるあれだな。——おっ、いいタイミングで来たな、トランプ持ってきてくんねーか」

「え？」

開きっぱなしのドアから、わたし達を見ていたのは。  
月火さんでした。

「気のせいじゃなかったんだ」

ぼつり、と月火さんは呟いて、火憐さんの隣に綺麗に座りました。

「真宵ちゃん、っていうんだね？」

彼女は、しっかりとわたしの目を見て、訊いてきました。

おや。

おやおや？

どういうことですか？

「何だよ月火ちゃん、盗み聞きかよ」

「火憐ちゃんの声が大きかったんだよ」  
で。

と、月火さんは仕切りなおします。

「うん、さつき部屋に入った時、真宵ちゃんがベッドで寝ているのは見たんだけど、気のせいかと思って、無視してました」  
気のせいって。

案の定、火憐さんも同じことを考えたようで、

「気のせいって……何言ってるんだよ、月火ちゃん」  
と心配そうに突っ込みをいれます。

「うん、何だかね、最近そういう幻？　を見るものが多くって。こないだ、火憐ちゃんが熱だったとき、お風呂にお兄ちゃんと金髪の子が一緒に入ってたのを見た気がしたし、最近女の子二人と綺麗なお姉さんが、お兄ちゃんと一緒にいたのを見た気がしたし、何だか自分の目に映るものが信じられなくなってるさ」

「へえ、月火ちゃん、そいつは大変だなあ。とりあえずこれから、そういうもんが見えたときはぶん殴っちまえよ」

「うん、そうするよ」

殴っちゃうんですか……。

「でも、チェーンソーだけどね」  
それもそれで恐怖です……。

「そんなことよりも。さつきは無視してごめんね、真宵ちゃん」  
「い、いえ……」

金髪の女の子というワードに引っかかりを覚えながらも、わたしは慌てて相手と同じく頭を下げました。

「でもそれがほんとだったら大したことだよなあ。兄ちゃんには戦場ヶ原さんがいるってのに」

「まったくもうだよ」

そこで、あれ、と月火さんは何か気付いたように私をじっと見詰めてきました。

しでの鳥。

聞いた噂では（八九寺Pの権限ですつ）、月火さんは、しでの鳥という怪異そのものなんだとか。

怪異上最も不死身の怪鳥<sup>けちよう</sup>。

吸血鬼をも凌駕する、不死身。

月火さんはそれであり、人間ではない、偽物なのだから。

家族であつて、家族でない。

妹であつて、妹でない。

偽物。

『最も』不死身、という言葉がつく怪異のこと、自らがそれであるという自覚はなくても、わたしを見て何か思うことがあったのかも知れません。

目を逸らしたいのを堪えて、わたしも月火さんを見詰めました。

「真宵ちゃん、可愛いね」

「はいっ？」

「今時ツインテイルの女の子なんて、珍しいよ。今度私もしてみよっかな」

「う、うーん……？」

「何だかね、最近そういう可愛い女の子を背後から襲撃して、抱きついては身体中を触りまくる、ストーカーどころか変態みたいな男子高校生が町を徘徊しているらしいんだけど、真宵ちゃん、知らないかな。あるいは、被害に遭った子とか」

あなた方もよく知っている人ですよ。

というかこの部屋でいつも寝起きしている人ですよ。

というかあなた方のお兄さんですよ。

そして被害に遭った子というのはおそらく、いえ確実にわたしです。

情報化社会って凄いですね。

「いえ、知りません」

まったく、どうしてわたしはこんな真似を。

阿良々木さんを庇うような真似を。

してしまうんでしょう。

「そっか。でも、真宵ちゃんも気をつけてね」

「はい」

もう時すでに遅しなんですけどね。

どこか腑に落ちないと言った顔をしていた月火さんは、「そっか。証言ではリュックをしまった女の子だったもんね」と呟いています。

何だか命拾いした感じです。

「おっと、紹介してなかったな。あたしの妹の月火だ。ファイヤーシスターズの参謀担当」

「よろしくね」

「よろしくお願いします」

「ファイヤーシスターズっていうのは、私たち二人の俗称みたいなもので、」

「そう、あたしたちは正義の味方、正義そのもののさ!」

息がぴったりです。

「兄ちゃんもこうして日々人助けに身を費やしてんだな、あたしたちも負けてらんないぜ」

とりあえず自己紹介を済ましたところで。

「じゃあトランプして遊ぼっか。十組もってくるね」

「十組ですか!？」

「うん。トランプタワーをつくるんだよ」

それは、火憐さんのことを考慮してなのだろうか……いえ、まさかトランプができないわけではないでしょうに。

と。

月火さんが部屋を出かけた時、誰かの携帯が鳴りました。

『燃えよドラゴン』のテーマ。

火憐さんの携帯です。

「はい、もしもし……んっ? んんんっ? 合点承知、すぐに行くっ!」

電話を切った火憐さんの目は、今までに見た事がないくらい燃えていて。

まさに火。

業火のようでした。

「月火ちゃん。行くぞ」

「え? うん、わかったよ」

一瞬ぼかんとした風の月火さんでしたが、次の瞬間彼女の顔もきりつと引き締まったものになっていました。

二人はわたしを見て。

「悪い、真宵ちゃん。あたしたちを必要としてる人がいる」

「ごめんね、真宵ちゃん。私たちはあなたの味方だけど、みんなの味方でもあるんだよ」

「そう、だから！ あたしたちは行かなくちゃいけないんだ、正義の為にっ！」

うおおおお、正義の炎が燃え上がるぜえ！ と火憐さんは叫びながら部屋を飛び出していつてしまいました。

それに続いて、月火さんが少しゆるく結んでいた帯を結びなおし、部屋を出て行きました。

そのちよつと手前、彼女は、

「その部屋は好きに使っていいからね。すぐに戻ってくるってお兄ちゃんに伝えてもらえれば嬉しいな」

そう言い残して。

ふたつの、小さくて激しい炎は去っていきました。

「……………ふう」

やっと静かになりました。

少し落ち着きました。

火憐さんのように、深呼吸をしながらわたしは再び考えます。

それにしても…………先ほど火憐さんは、『兄ちゃんはあるたを置きっぱでどっか行っちゃったのかよ』とぼやいていましたが、まったく人のことが言えていませんね。

本当。

そっくりなんですから。

きっと電話では、誰かが二人に助けを求めていたのでしょうか。迷わず二人は、助けに向かうのでしょうか。

阿良々木さんのように。

はあ。

きょうだい  
兄妹が羨ましい。

そう思ってしまった。

わたしは一人っ子です。

わたしは一人娘です。

確か、昔の歌に、『言問はぬ 木すら妹と兄とあり といふをただ ひとり子に あるが苦しさ』というものがありました。

物を言わない木ですら兄妹がいるのに、わたしは一人であることが悲しい。という意味だそうです。

阿良々木さんですら兄妹がいるのに、わたしは一人です。

兄妹はいいですね。

家族って——いいですね。

ちよつと涙が込み上げてきそうになって、でもそれは止まりました。

部屋に、ぬつとひとつの影が現れたのです。

わたしは驚いて、大きく息を呑んでしまいました。

相手は、凄惨に笑って言いました。

「おうおう、こんな形でうぬと対面することになるうとは。どうじゃ、元気にしておるか、ツーテイルの迷い子よ」

## まよいメモリー 其の伍

005

金髪の女の子、もとい、忍野忍<sup>おしのしのぶ</sup>さんは、そう言いました。  
そこでわたしは。

どこか違和感を感じてしまいました――。

忍さんの、『迷い子』という言葉に。

相手が、元怪異の王、ノーライフキングである吸血鬼であることも忘れて、わたしはその言葉に引っ掛かりを覚えてしまいました。

「我があるじ様の活発な妹御が、迷惑をかけたの。あれは我があるじ様の計らいで、出勤させた」

「……？」

「いや、ただ儂が公衆電話と言うのかの？ あそこから『虎に追われている、助けてくれ』とか出任せを言うように命令されてな。つまり嘘の救助に向かっておるとのことじゃ。いやはや実に愉快じやの。場所も言っておらんのに電話を切りおったわ」

かかつ、と笑う忍さん。

吸血鬼は、電話が使える現代っ子になっているようです……。

「どうした、そう固くなることはない。儂は前々からうぬと対談したいと思っておった。嘘の電話をしたのもそれ故じゃよ――ふたりきりで、面と向かって、話がしてみたかった」

「……そ、そそそんなんですかつ？」

つい緊張して噛み噛みになってしまいました。

「我があるじ様の被害者の会――あれに儂も参加したくてのう」  
「……………」

忍野忍さん。

金髪金眼の、幼女の姿。

その髪を晒して、この世のものとは思えない真っ白なワンピースに裸足の格好で。

わたしの前に、立っていました。

見た目的にはわたしよりも年下なのですが——実年齢は五百歳だとか。

そして、吸血鬼の成れの果て。

力を奪われ、阿良々木さんの影に閉じ込められ、ひとりだけでは決して生きていけない、そんな儚い存在になってしまった彼女。

……一番阿良々木さんの側にいると言っても過言ではありませんからね、きつと色々あるでしょう。

それに、阿良々木さんの感情がそのままリンクするそうですし。

きつと色々わたしがご迷惑をお掛けしているのでしょう。

わたしが言いたいことも言えないまま、忍さんは坦々と話を進めていきます。

「いや、うぬも訊いてくれぬか。我があるじ様とこの間ミスタードーナツに行ったのじゃが」

「……………」

そうでした。

彼女はドーナツが大好きなものでした（しかもミスド限定です。彼女の為にゴールデンチョコレートは必ず置いておくべきだと思えます。そういうえば『小枝』とのコラボでゴールデンチョコレート味が出ていましたねえ。おっと、括弧の中が大変長くなってしまいましたっ）。

「あやつめ、たった十個しか選ばせてくれなかった。たった十個じやぞ！ 儂がどれだけ迷いに迷うてドーナツを選択したと思う。一体何種のドーナツを諦めたと思っておるのじゃ。我があるじ様はこ

せせせして、まったく女性に対してもつと優しく接することができ  
んのか、わがママを聞いてはくれんのかと、そう思うのじゃ。うぬ  
もそう思うじゃろう?」

「は、はい……確かに……」

どうも緊張感に欠けますねえ。

そもそもこの話題が非常に幼くて可愛い気がするのですが。

おかしです。

幼い、可愛い、少女。

「じゃから」

気が付けば、忍さんはわたしを睨み据えていました。

鬼のそれは、やはり健在で。

上位の怪異なのだと、格の違いを見せ付けられた気がして。

わたしは、飛び上がってしまいました。

「固くなるでないと、言っておるじゃろうが。ガチガチに緊張した  
小娘と対談しても、何も面白くない」

「は、はいっ！ すみませんでしたっ」

忍さんは満足げに頷いて、わたしと向かい合う形で座りました。

体育座りではなく、足を崩した座り方。

女の子らしい座り方でした。

わたしも、それに倣って座ります。

正座。

「うぬも大変じゃのう。我があるじ様の魔手から逃れるのはさぞ大  
変じゃろう」

「はい……あつ、でもこの間忍さんはわたしを助けてくださいまし  
た」

「あれは単なるきまぐれじゃよ。……実は今日もな、僕は止めよう  
と思ったのじゃ。じゃが、僕にダイレクトにあれの感情が伝わって

きてのう——興奮していないのにテンションだだ上がりで、気が付けばうぬはこうして拉致されてしまったというわけじゃよ」

「……………」

やっぱノリとかじゃないんでしょうねえ。

本当の本当に愛情表現なんでしょうねえ。

「かく言う儂も被害者でな。先ほどのドーナツの話ほどではないが、それでもうぬと似たような話じゃから訊け」

「はい」

「我があるじ様は、朝も昼も夜も、儂のことを考えてくれておる。儂にもそれが伝わるから分かるのじゃ」

考えて。

それは、反省しているのでしょうか。春休みの出来事を。

「そう。この間は寝言でこう呟きおったわ。『あの春休み、少しでも気付いていれば——僕は忍の胸を触らせてもらえたかもしれないのに。どこるか揉めたかもしれないのに』」とな」

何言ってるんですか阿良々木さん！

反省の色がまるでありません！

もう桃色どころか紫色です！

それに……忍さんにとっては、ドーナツほどではない話なのですね……。

「頼めば許してやったものを。今ではもう遅いのが。かつ、もう儂はあつてないような胸ではなく、あるものもない胸じゃ、とても我があるじ様を満足させることはできん。小娘、うぬの方が今は儂よりも勝っておるのじゃ、ぺったんこな儂の代わりに、相手をしてやってくれ」

「うつ……もうとつくに相手にされてます」

「思えば我があるじ様の喜ぶ要素が今の儂には微塵もないの……パ

ンチラとか。いやもう儂には関係ないことじゃよ」

メタネタを絡めてきましたか……実際のところどうなのかはさておいてですね。もう少女にあるまじき会話ですよ。

それに忍さんのことを阿良々木さんは随分可愛い可愛いと言っていましたし、相当ときめいてると思いますかね。

と言うか阿良々木さんがロリーでないわけがないですし。

綺麗な忍さんと、始終くつつけて、そういう意味では嬉しいのではないでしょうか……。

「馴れ合うつもりはないと忠告したはずじゃがなあ。いつ儂が我があるじ様を裏切るか、分かんというのに」

にやり、とそこで忍さんは、幼女がするはずがない邪悪な笑みを浮かべました。

それは……どういうことでしょう。

二人の絆が……切れるときが来ると？

「ふと思ったのですが忍さん」

「何じゃ」

「阿良々木さんは、どこですか？」

「ふむ」

忍さんは、阿良々木さんなしで単独行動は不可能な存在になっています。

だから、忍さんがここにいるということは、近くに阿良々木さんがいないとおかしい話です。

おふた方のその奇妙な絆が切れてしまったわけでもなさそうですし。

「心配するな——我があるじ様は、階下におるよ。少しばかり問題が生じておるようじゃったが……じき来るじやろっ」

ツーンテイルの迷い子よ。と、また忍さんはそう付け加えました。

やはり我慢できなくなつて、わたしは尋ねました。

「あの……忍さん」

「む？」

「なぜ——わたしをそう呼ぶのですか」

「はて」

まるで分からん、と言う風に首を傾げる忍さん——可愛いです……  
…と思つていいかは分かりませんが。

「わたしは——もう、迷い牛ではありません。もうわたしは、迷子ではないんです。なのに、」

どうして。

まるで、今もまだ迷っているかのように。

わたしをそう呼ぶのですか。

「いや」

冷たい目でわたしを見つめる忍さんの表情は、真剣なものになつていました。

「うぬは、迷<sup>、迷、迷、迷</sup>つておる」

「……………」

「迷い、迷い続け、拳句の果てに、まだ迷つておる」

……。

迷っている？

わたしが？

一体、何に？

「うぬが未だに現世に留まつておるのには、何か理由があるのではないのか？」

それは——あります。

まだわたしには分かりませんが、きっとあるのです。  
そんな気がします。

「それとも、単に我があるじ様の巨大な愛の引力が引き止めておるのか？」

「そ、それは嫌です……」  
信じたくない！

そんな説は絶対有り得ませんっ！  
でも結構可能性はありそう、と思えてしまうのが嫌です。

「うぬは、まだ迷うておるよ」  
相手は、そう繰り返し。  
今度は、優しく笑いました。

「何か悩みがあるのなら、我があるじ様に相談すればよいじゃろう。必ず、何とかしようとするのではないかな」  
「……………」

わたしの、悩み。  
それは死後の悩みなのか。  
生きていた頃の、悩みなのか。  
それでも、心当たりは——ありました。  
いくつか。

「はい……わたしは、悩んでいることがあります。だから、忍さんが迷っているとおっしゃるのも無理はありませんね。わかりました。ありがとうございます。できたら、阿良々木さんに相談することにいたします」

「そうか。それがよい」  
わたしは、阿良々木さんと約束しましたからね。

——もしもまた、わたしがどうしようもなく困っていたら、そのときは助けていただいても構いませんか？——

——助けるよ。当たり前だろ。

他の奴にお前を助ける暇なんて与えない。

つか、僕に相談しなかったら怒るからな——

そう回想しているうちに。

いつの間にやら、お待ちかね。

わたしとしては、話がようやく進展するという点では、確かにお待ちかね。

息を切らして階段を昇り、自分の部屋に戻ってきた汗だくの阿良々木さんが、わたしと忍さんを見つけて笑いました。

無駄に幸せそうな笑顔で。

## まよいメモリー 其の陸

006

ここで少し時間を巻き戻しましょう。

時計の針をぐるぐると、だいたい一時間ほど巻き戻した辺りの時刻、つまり十一時頃。

わたしの拉致された時刻です。

まあ当時のわたしは拉致されるなんて思ってもいませんでしたから、いつものように道を歩いている時に、大きな足音が聞こえてきても、「ああ、阿良々木さんですか」と相手の一撃を待っていたのです――

「はちくじいいいいいいいい！ 奇遇だな、こんな道中ではったり会うなんてさあ！ もうお前の行動パターン読めねえよ、探しても見つからない時はとことん見つからないし、日が暮れちゃったことだってあるし！ いやでももうお前は僕の読め、じゃない嫁だから、誰が何と言おうと僕の嫁だからっ！ ほら、だからもつと触らせる抱きつかせる舐めさせる揉ませる脱がれ、痛<sup>い</sup>って、噛<sup>い</sup>んだし！」

とか何だかわけの分らないことを叫びながら。

もしも相手がわたしの知らない人だったら、誰ですかこの変態、と警察に通報するような発言をしながら。

まず彼は勢いよくわたしに抱きついてきました。

デープハグです。

この程度ならいい、大丈夫です。

次に頬擦り。

この程度ならいい、大丈夫です。

続いて両手でわたしの身体を弄<sup>もよほ</sup>る。

この程度なら、だ、大丈夫です。

お次はキスを。

何だか前回よりも過激になって、これディープなんじゃないですか？　みたいな感じですが。

この程度なら、なんとか大丈夫です。

そして彼はそれでも物足りないのか、わたしの胸に手を伸ばして、  
って、これはもう！

この程度じゃないですし！

大丈夫なわけないですし！

いえ、ずっと前の段階からこの程度がどの程度かわからず、大丈夫がだいじょばないになっていたのですが！

わたしが噛み付こうとするも、彼の両手はわたしの噛み付ける範囲にあらず——抵抗がついてます！？

断言しますが、わたしは好きでこうされてるわけでは決してありませんからねっ！

「ぎゃああああああああああああああっ！！！」  
悲鳴を上げてても無意味なことはわかっています。

阿良々木さんを元に戻せることは、わたしには不可能になってしまいました。

「こらっ、八九寺！　そんな大声でしたらご近所に迷惑だろうがっ！  
！　それに僕が悪い奴みたいじゃねえか！」

とことん悪い奴です！

あなたは変態です！

「仕方ないな」

阿良々木さんはそれからぶつぶつ独り言を言いながら、わたしを担ぎ上げて、自転車の前カゴに放り込みました。続いて阿良々木さんはどこからか紐を取り出して、安全運転がどうか言いながらわ

たしを縛り、そうして。

わたしの記憶は此处で途切れ。

阿良々木さんはわたしが気を失ったのをいいことに、ちゃかちやかわたしを乗せて帰路に着いたのですた――

って何ですかこれ。

人間のすることではありませんよ。

そうして今に至るわけですが。

今だからこそうして落ち着いて回想ができましたが、って、

「落ち着けるわけないでしょうっ！」

戦闘態勢に入るわたし。

姿勢を低くして、爪を立てます。

「阿良々木さん！ また罪を犯しましたねっ！」

「ちよつと待てよ八九寺。僕がセクハラがしたくてお前を拉致したみたいなことはまだ一言も言っていないだろう、ちゃんと理由があるんだよ。えっと、」

「明らかに今考えてるじゃないですか！ 前回も言いましたが、阿良々木さんは当たり前のようにわたしを拉致してはいますが、これ、本当だったら立派な犯罪ですよっ！」

「いやでも、お前はもう死んでるから大丈夫だってこの間言ってくれたじゃん」

「あれは慰めただけです！」

前回、が何の話か分からない方は、『化物語アニメコンプリートガイドブック』を一読することをお勧めします。

「何気にメタ発言するな」

「何気に地の文を読まないでくださいっ」

宣伝も大事なのです。

「いや、前回とか言っちゃってるけどさあ、八九寺。僕は何回お前を拉致監禁したか、もう覚えてないぜ」

「な、何ですって!？」

「ふっ。少なくとも五回はしてるな」

「自慢げに言うことではありません!」

忍さんはそんなわたしたちを見て楽しげに笑い、

「かかつ。いいぞ、小娘——もっと我があるじ様を困らせるがよい」と、阿良々木さんの影にダイブしていきました。うっ。

わたしも行きたいです——いえ、阿良々木さんの影は……やっばり嫌です。

「ていうかさ、何だよ八九寺。目が覚めてるのに律儀に僕を待ってたのか？ 何？ 何か期待してんの？」

「してません！ わたしはただ、リュックを返してもらいたいですよっ！」

「あれ。八九寺、お前、覚えてないの？」

「覚えてるわけ、え、え？ 何のことですか？」

「いやさ、お前のリュック、僕とお前が熱愛のダンスを踊ってる時に」

「誰も踊ってません」

一人で踊ってればいいんです。

わたしの手の上で！

って、踊らされてるのはわたしですよね……。

「なんか勝手にお前の背中から落ちて、」

「いえ、阿良々木さんが脱がせたのでは」

「とにかくあれさ、もうそれは昔話のおにぎりよろしく、」

「ころころ転がって……？」

「うん、池にぼっちゃん」

「は……はいつっっ!？」

池に!？」

ぼっちゃん!？」

わたしのリュックがつ!!？

「な、何ということでしょう……それでは、これから、わたしと忍さん、そして火憐さんと月火さんが総出でリュックを探す、スーパ―アドベンチャーストーリーが繰り広げられるのですねっ……」

「おい、僕はどこへ行った」

「阿良々木さんはもうどこかその辺で木の役でもやってればいいんです」

「エキストラ以下かよ!」

「いいじゃないですか。植物になりたかったんでしょう?」

「もうそんなことは思っちゃいねえよ」

それに、と阿良々木さんは何故か爽やかにわたしに笑いかけます。

「なあ八九寺。お前、僕を見て何も思わないわけ?」

「いえ? ああ、身長縮みました?」

「違えよ! つーかこれ以上縮んでたまるかよ!」

どうでしょうかねえ。

……どんな状況にあってもきちんと突っ込めてボケれるわたしたちは、ある意味最強です。

「ほら。よく見ろよ」

「んー。濡れていますね」

?

濡れて?

濡れて、いる?

汗ではなくて？

「阿良々木さん——もしかして」

「そう、そのもしかしてだよ」

「ああ！ 今度は水になろうとしているのですね」

「誰かなるか！」

「なるほど、液体になるのはさぞかし大変でしょうが、応援してま  
すよ」

「お前さあ、引つ張るよなあ！ 先が聞きたいの、聞きたくないの  
？」

「……聞きたいです」

「じゃあ黙って聞け」

やりすぎはいけないようです。

「ちゃんと、お前のリュックはとってきたから」

阿良々木さんは濡れた髪を掻き<sup>むし</sup>りながら言いました。  
なんと。

阿良々木さんがもう取ってきてくださったとは。

おや？

でも、阿良々木さんは——

「やめる八九寺。そこからは禁句だ。『化物語アニメコンプリー  
トガイドブック』を読んでない人がいたらどうする」

「どうするもこうするも、買う以外ないと思いますが」

「宣伝し続けるな」

「で？ 今わたしのリュックは何処に？」

「ああ。池に落ちたんだから、濡れて当然なんだけど、不思議なこ  
とに、引き上げてみたら全く濡れてなかった」

それは、多分……もう此処にはない物だからでしょう。

幽霊のもっている物は所詮この世にないものです。

濡れるわけがないでしょう。  
濡れても、すぐに元に戻るでしょう。

「まあ一応干してるけど」

「ありがとうございます」

「一応中身全部出して干してるけど」

「中身が晒し者ですっ！」

本当は、もっと感謝するべきなのでしょうが——わたしは突っ込むことで、逃げました。

いえ。

もとはといえば、阿良々木さんが悪いんですけどね。

「いやあ。何だかお前の日常生活が垣間見れた気がするぜ。八九寺はこんな枕で寝ているんだ、とか」

「やめてください阿良々木さん。プライバシーの侵害です」

「プライバシー？ 幽霊にあるのかそんなもん」

「さも不思議そうに言わないで下さいっ！ ありますよ、あるに決まっています！ むしろないと困ります！」

泣いちゃいますよ！

「ああ、ごめんごめん。すぐに戻すからさ」  
言って。

すぐにリュックを取りに行く阿良々木さんは、やっぱり。  
優しすぎる、とわたしは思いました。

まよいメモリー 其の陸（後書き）

あ、あららさんが勝手に暴走してしまいました…あーあ。私阿良々木さん結構好きなのに。

## まよいメモリー 其の漆

007

「アララトさん」

名前を噛む苦労。

これは阿良々木さんは決して理解していないことでしょう。小学生にとってはハードルが高すぎるものです。

というか、何回も繰り返し噛み続ける小学生はそういないと言つてよいでしょう。

普通だったら飽きますって。

訊いてる方はどうなんだか分かりませんけれど。

脳をフル回転させて、とにかく似ている単語を口にする。それは。

「八九寺。僕をオーストラリアのビクトリア州にある町の名前のように呼ぶな。というかどっから出てくんだ、そんな言葉。お前の頭はどうなってるんだ、お前は歩く辞書かという疑問をとりあえずはぐつと堪えて言わせてもらうが、とにかく僕の名前は阿良々木だ」

この返答を待っているから、ただそれだけの理由で。  
わたしは、名前を噛むのです。

「失礼。噛みました」

「違う、わざとだ……」

「噛みまみた」

「わざとじゃないっ!？」

「アララト山でした」

「もはや山の名前じゃねえか」

しかもそれトルコにある山じゃん、と阿良々木さん。

ふむ、ちよつと違うパターンでもすかさず突っ込み返すとは、流石としか言いようがありません。

「なんだ、ずつと噛まないから心配したぜ、八九寺。ひよつとしてそのキャラを忘れちゃったんじゃないかと心配したよ」

「いえ、そんな心配は無用です」  
「というかそんなことを心配されても困ります。」

「でも……そろそろこの噛みキャラを捨てましょうかねえ」  
「何真面目な顔して言っただい!？」

「いえ、だってわたしは神に値するキャラですし」  
「何か格好いいけどお前は決してそれほどのキャラじゃねえよ。そして噛みキャラと神キャラを紙一重にするな」

神はやつと忍がなれる程度だろ、あるいは羽川だろ、と言う阿良々木さん。若干うまいことも言っちゃってますが。  
まあここら辺は中身の無い会話なので、話もどんどん逸れていきますが。

リュックを取って帰ってきた阿良々木さんに、またわたしはお礼を言わずに、言えずに、誤魔化すように名前を噛みました。

素直に感謝の気持ちを述べたいのに。

ありがとう、たった一言だというのに。

噛む方が、容易い。

「阿良々木さんが変態という重装備の鎧を捨てるまで、噛みキャラを捨てるというのはいかがでしょう」

「お前から噛むのを引いたら何が残るんだよ」

「不肖わたしのメリハリボデイ」

「だからお前にメリとかハリとかどこにあるんだって言っただろ! 　　ていうかこれは二度ネタだからな!」

厳しいですねえ。

だから小学生にはハードル高いんですって。  
ハードなんですって。

でも、照れ隠しであるということはバレなかったようです。

……。

阿良々木さんって、ゲームで攻略しやすい人ですねえ。

随分前にギャルゲーの話を持ち出しましたが、オトゲーの攻略キヤラに阿良々木さんがいるとしたら、一番にクリアできてしまいそうなの、そんなちよいいな気がします。

誰でも簡単に落とせそうなの。

まあそれだとゲーム的にはとてもつまらない内容になりそうなの  
で、阿良々木さんルートでのみ攻略できるキヤラ（忍野さんのような方）を出演させればなかなか面白そうではあります（学校の教師  
ポジションみたいなの）。

「阿良々木さんってちよろそうですよね」

「あ？」

つい声に出してしまいました。

「まあ、妹達からは随分見下されてるけどさ……」

「いえ、あれは尊敬しているんですよ」

一応。

そういえば、妹はもうどこか行っただのか、と阿良々木さん。どう  
やら本当に彼の計らいでお二人は出掛けてしまったようです……。

「あいつら本当に懲りてねえな。なんで非通知なのに出るんだよ」

貝木かいぎから何の教訓も得てねえ、と阿良々木さんはぼやきますが、  
あなたも今までのことが何も活かされてないと思いますよ……この  
間のツーマンセルの陰陽師おんみょうじとのバトル、あれは今までの経験が全く  
活かされていなかったと訊きます。

いつでもいつでも、どんな状況でも。

どんなに自分が不利な立場にあっても、必ず、助けようとするんですから。

「でも、お二人には優しくしてもらいましたよ」

「あー、あいつらにも見えたんだな、お前」

見えた、という単語に少し傷つきましたが、わたしは頷きました。

「いらんことかしなかっただろうな」

「どうしてそんなに怖い顔で言うんですか……余計なことをするのはいつも阿良々木さんです」

「む」

「今だってわたしの足を舐めるように見ていたじゃないですか」

「むむう」

まったく、女子はそういうのに敏感なんですって。

地の文にないだけで実際阿良々木さんはいつもいらんことをしているんです。

映像化でもぎりぎり誤魔化せましたが（わたしのバトルシーンとかですね）、あれはスタッフのよき計らいでしょう。

「そんな暇があるんでしたら早く話を進展させてくださいよ。先ほどからまったく話が進んでいる気配がありません」

起承転結のどこなんでしょう、今は……。

それでも阿良々木さんは一向にその気はないらしく、

「お前さあ、そんな発言してまで進めたいのかよ。僕はさ、お前とられるんだったら永遠に完結しなくていいと思ってるぜ」

とさらっと酷いことを言いました。

やめてください。

「それに、阿良々木さん。リュックを持ってきてくださったのは嬉

しいのですが、あなたはいつまで濡れたままでいるんですか」

「お。水も滴るいい男状態だ」

「確かに滴ってはいますけど」

どんな状態ですか。

とにかく。

「わたしの為に池に飛び込んで、結果風邪を引かれてしまうというオチは正直言っただけで申し訳ないんで、さっさと拭いたらどうでしょう」

「うん、そうだな、そうするよ」

と阿良々木さんはそう言っただけで、出し抜けに、

「シャワー浴びるけど、八九寺も来るだろ？」

「何当たり前みたいな顔してとんでもないこと言ってるんですか！」

「えー？ これって流れるには一緒にお風呂じゃね？」

「どんな流れでそうなるんです、阿良々木さんの頭はいつたいたいという構造をしているんですか！」

歩く変態とはあなたのことです！

「リュックの中には着替えも入ってるし、丁度いいじゃん」

「やっぱり中身全部見られてますっ！」

「ほらほら、お兄ちゃんと入浴なんて滅多にできないぜ」

「それはわたしには兄なんじゃないからとよりできませんよ！」

あと、常識的に考えて兄と風呂に入るなんて有り得ませんからね

っ

「え？ そうなの？」

「何ですかその反応は！」

まさか！

まさかまさか！

火憐さんと月火さんが心配になるわたしでした。

と、その隙に。

「隙あり」

にゅつと阿良々木さんの手が伸びて。

「な、何ですか阿良々木さん——って、ひゃうっ!？」

抱き寄せられて、頬擦りをされるわたし。

正直鳥肌が大変なことになってます。

相手は阿良々木さんで、その上濡れているんですよ？

「いやあ、ほら、俗物語ではさ、僕お前に何もできなかったじゃん。その分をここで返そうと思ってさ」

「そんなものいりませんから、あの、早く離れてください。ていうか、阿良々木さん、もはやキャラが残念なことになってます」

「そんなの二次においてはよくあることじゃん」

「そうですけれど」

そうですけれど。

そうではなくて。

この状況ですって。

体をぴったりと密着させてきて、一向に離れるつもりのない阿良々木さん……うう、苦しいです。

自分で状況を描写するのも苦しいです。

「今回物語の権限はすべて僕に委ねられているのだ」

「そんな……! そんなことは一切訊いておりません……! 大体そうだったらわたしは出演拒否しています」

ていうか誰も出演しないでしょう、そんなの。

そんな中身のない話をしている間に、阿良々木の手はさらに伸びて。

わたしの服をまさぐり始めました。

「ほらほらー、八九寺、風呂入ろっぜ」

わたしが悲鳴を上げる、その直前。

本当に直前、ぴたりと相手の手の動きが止まり。

「ん」

そして力を少し入れて、ぐりぐりと、わたしの胸を服越しに撫でました。

撫でるといっか、擦る感じさすで。

「んん」

そしてさらに力を入れて、今度は背中をぐりぐりと擦ります。

摩り下ろされる林檎の気分です……。

一体何をやってるんですか。抵抗をしても、通用するはずもなく阿良々木さんは果たして自分が何をしているのか自覚しているのでしょうか。

「おい、八九寺」

「……？」

「それ、脱がすぞ」

今度こそ、わたしは悲鳴を上げました。

それでもこの声は誰に届くはずもなく。

気がつけば、わたしはうつぶせに倒され、阿良々木さんに馬乗りにされていました。

何ですかこの状況！

八九寺真宵はいやらしい女の子になってしまいましたっ！

「な、なな何やってるんですか阿良々々々木さんっっ！」

「八九寺」

わたしが名前を囁んだのも無視して。

阿良々木さんは、身動きの取れないわたしの背中を指差しました。

「お前、どうして言わなかったんだ」

わたしの誤魔化しが通用するはずもなく。

阿良々木さんはただ一点、わたしの背を見えています。

そこには、確認するまでもなく、傷がありました。

過去に、父親から受けた傷跡が、残っていました。

まよいメモリー 其の漆（後書き）

うわあああ、ごめんなさい阿良々木さん……  
そして真宵ちゃんもごめんなさい……  
やっと本編が垣間見えてこんな始末です。

## まよいメモリー 其の捌

008

「阿良々木さんには、いえ、誰にもお話していなかったことがあります」

わたしは、そう切り出しました。

わたしの過去の記憶。

誰にも明かさなかった秘密を、いま。

話すときが、来たようです——と、そんな大した話じゃありませんけど。

昔々のその昔——というほどのことではありません、ほんの十年ほど前の話です。あるところで、一組の夫婦が、その関係に終焉を迎え、その夫婦の幼い一人娘は、父親に引き取られることになりました。

一人娘の母親は、——言うまでもなく、わたしの母親はわたしの父親に誓ちかわされました。

半ば無理矢理に誓ちかわされました。

二度と、わたしには会わないことを。

そしてわたしも同じく誓ちかわされました。

誓ちかいました。

父親との二人暮らしが二年目を迎え——わたしは、自分の母親の顔が思い出せなくなっている自分に、気付きました。

彼女が自分の母親であると、確信が持てなくなったのです。

そしてここから、禁断の領域。

わたしの心の奥深くに閉じ込めた記憶。

わたしは、母の日に自分の母親に会いに行こうという計画を立てる前々から、時々、たまに、彼女のことを口に出すことがあります。

それは、懐かしさゆえ。

当たり前じゃない現実を受け止められず、当たり前のように口にした、「お母さん」――

父親は、わたしがそう言うことすら、嫌がっているようでした。彼は、わたしがそう言ってしまうたびに。

暴力を。

力を振るって、わたしに、手を。足を。

わたしだって、思わず口が滑ってしまったただけのこと、決して意識して口にしたわけではありません。

でも。それでも。

母親が懐かしくて。

お母さんが今、ここにいないことが不思議で、不思議で。

涙を流して、「お母さん」と言うと、また拳が飛ぶ。

家で一人のとき、帰り道で一人になったとき、わたしはいつもその言葉を。

呟いてしまう。

お母さん。

お母さんお母さんお母さんお母さんお母さん――

会いたい。

わたしの母親は、本当にわたしの母親なのでしょうか。彼女を母と呼んでよいのでしょうか。わたしは一体誰の娘なのか――わたしは本当にお二人の娘なのでしょうか。

傷を負ってから、わたしは父親の前で禁断の言葉を口にすることはありませんでしたが――ちょっとでも、そのような素振りを見せると。

例えば、思い出のアルバムを見ているときとか。

彼としては、耐えられない何かがあったのでしょうか。

子供に暴力を振るうことが正しいかはわたしにはよく分かりませんが――父親の気持ちを、考慮すれば。無理もないことなのかもしれません。

ある時——わたしが、母親に会いに行こうと決断してから何日か経った日——わたしは母親の住所を調べ上げ、メモをしていた紙が、父親に見つかってしまったことがありました。

いたずらがばれた子供、どころではありません。

あれが、最後で最大の暴力でした。

悪いことをしたとは、わたしは思っていないませんが。

それでも、謝ったのは憶えています。わたしの意志で、謝罪したことは、記憶しています。

はつきりと。

父親がメモを破り捨てても——わたしは、それをちゃんと頭で記憶していました。わたしはその日に再び、別の用紙に住所を書き、母の日の出発に備え準備を再開しました。

「それからのことは——話す必要もないでしょう？」

「……じゃあ、その背中傷は、」

「はい」

わたしは感情を抑えて言いました。

役者としては完璧です。

「わたしの父親が——つけた傷です」

「お前、そんな、そんなことがあっていいと、」

「思いませんよ、もちろん——ですけど、阿良々木さん、わたしは誓った身ですよ、母親に会わないとわたしはわたしの口で誓ったのです。それに背くのは……嘘つきです」

「でも、子供は親に会う権利があるって」

「あの、失礼ですが、阿良々木さん」

「……？」

きょとんとされる阿良々木さん。

いやいや。

「よろしければ、退どいてくれませんか。いつまで馬乗りになっ  
てるんです。そしてそろそろ服を着させてください」

どんな格好でこんな話をしたと思っているんですか。  
まったく。

「悪いが、その気はない」

「あってくださいよ！」

「まんざらでもない」

「わたしとしては最悪です！」  
ほら！

地の文にないだけで。折角のシリアスシーンも台無しです。

果たして、阿良々木さんは退いてくれました。退く前にわたしに  
何かよからぬことをするのではないかと警戒しましたが、彼にして  
は珍しく、そのようなことはしませんでした。

わたしの服のしわを伸ばして、阿良々木さんは渡します。

……細かいしわまで、伸ばしてから。

「あの……やはり阿良々木さんの変態兼ロリコン度数が半端ないこ  
とになってますよ」

「そりゃあ僕は半端に生きるつもりはないさ。まっとうに生きよう  
と、僕はあの春休みから誓っている」

「この会話においては、折角のその台詞も台無しですね」  
まっとうに変態貫いてどうしようというのです。

「でもこれは八九寺としては喜ぶべきことじゃねーの？ 僕はもう  
お前の服にすら興奮を憶える身になったんだぜ、これでお前の貞操  
は安泰だろうが」

「いえ、堂々と言うところで、わたしの貞操がどうかという問題で  
はもはやなくなっていると思います……。そもそも、わたしの胸を  
触っただけで、傷に気付くあたり、人類であるとは到底思えません」

「あ、別に胸を触って気付いたわけじゃないぜ？　もちろん背中を擦って分かった」

「それでは、胸を触られた意味はないじゃないですか！」

「うん、まあ、ついでのな」

ドン引きです。

こうして普通に（？）会話できているのが恐ろしい。

「もう、これ以上こんなことをするようでしたら、わたしにも手段はありますよ」

「手段……？　何だ、また八九寺Pの権限か？　残念ながら僕はそんなものには左右されないぜ」

「もちろんそうではありません」

まあ、実際。

羽川さんのオープニングを羽川音頭にする権限を持っていたというのは、ここだけの話で。

「ご存じないかもしれませんが、わたしはこれでも結構知り合いが多いですよ」

「ほう」

何十年も——歩いているのですから。

「その知り合いの中には、こんな方々がいらっしやいます。」

人類最強——赤き征裁、デザート・イーグル砂漠の鷹と、多くの通り名を持つ美人の

お姉さんや、人間失格と呼ばれますが、それでも殺人鬼である格好いいお兄さんに、ちよつと阿良々木さんを懲らしめてもらいましょう」

「ご存知あるわけないだろ、そんなこと！　ていうかそんな奴らと仲いいのかよお前は！　八九寺Pどころじゃねえ！」

「そんな奴らとは聞き捨てなりませんね。それに、あの方々はいつでもどこでも、その気になればいつでもわたしのもとに駆けつけて

くれるのですよ」

「お前は一体何者なんだよ……」

「ふむ。通り名は無垢なる慇懃無礼いんきんぶれいとかどうですか？」

「自分で慇懃無礼いんきんぶれいって認めたな！」

しかも長えよ、と突っ込む阿良々木さん。テンション上がってますねー。

ま、そりゃあ、命の危険もあるわけですし？

「それでも、鷹たかってイーグルであってましたっけ」

「あー、それは皆よく分かってることだと思うから、言う必要はないと思う」

「左様でございますか」

茶化すように言っつて、ようやくわたしは服を着ました。

これだけの動作に一体何十分要したことが。

冬だったら風邪引いちゃいます。

さて。——どこまで話しましたっけ？

「ええと、確か僕がパンツが大好きだという話だったっけか」

「阿良々木さん。話の戻りっぷりが前の巻どころじゃありません」

「戯言ちやうごなんだよ」

「はあ。阿良々木さんだと様になりませんねえ」

と、わたしはキメ顔で言っつてから。

「まあ、少なくとも羽川さんにはチクっちゃいますからね」

「マジでか」

「火憐さんと月火さんが、ロリコン情報を収集中ですから、そちらに言っつのも面白そうではあります」

「面白くもおかしくもねえ、っーかりアルで嫌だ」

収集中って、よく噛まなかったな、と阿良々木さんは言っつてから。

「八九寺、ふざけるのもこれくらいにしてだな、  
珍しく彼から話を元に戻されました。」

「僕には、今、できることはあるのか？」

「……と、言いますと？」

「やっぱ、違うか。これは、過去の問題だもんな——できることなんて、ないのか」

「……………」

そう。

この傷は、癒えることはもうないでしょう。それが、死んだときのわたしの状態なのですから。

それでも、それでもですよ？

わたしの傷ついた心は——癒えないことはないのです。

ゆっくり、時間をかけて。風化ではなく、劣化ではなく。

思い出として、受け入れられるようになっていくのです。もう、

わたしは、このことに関しては何も悩んではない。

迷ってはいない。

ですが、そう——引っ掛かっていることは、確かにあるのですた——。

「阿良々木さんは、本当にお優しいんですね。いえ、大丈夫ですよ、もう、わたしはこの過去のことは、自分で解決したつもりです」

「そ、うか……」

「本当ですって。逆に、変なことをしたりしないで欲しいです。わたし自身、まだ分かっていないことに、干渉は不要です」

間違った対応は、お互いにとっていいことは何もありませんよ——と、わたしは釘を刺してから。

確認するように、言うてから。

「しかしですね、」

「うん？」

「阿良々木さんは言ってくださいましたよね——わたしがどうしようもなく困っていたら、そのときは助ける、と」

「……ああ」

「今、わたしは思い出したことがあるのです。そう、これは——わたしが今もなおここに残り続ける理由、なのかもしれません——いえ、それほどではなくても、その理由のひとつなのかもしれません」  
「何だ、八九寺。随分と回りくどいな。僕は、僕ができる範囲でだけだけど、お前を助けたい。前にも言ったけど、僕以外の奴が助ける暇さえ与えないつつたよな」

嬉しいことを。

いつてくれますね。

思わず、顔がほころんでしまいます。

「それでは、お頼みしてもよいですか？」

「おう。任せろ」

で、何だ、頼みつて。と尋ねる阿良々木さんに、わたしは、一言一言噛み締めるように言いました。

「わたしの、学校に、行きたいのです」

## まよいメモリー 其の捌（後書き）

ようやく本編突入です。まだ傾物語を読んでいない私…というか田舎にはまだまだ入荷されないのです。

## まよいメモリー 其の玖

009

阿良々木さんのぽかんとした表情は、なかなか新鮮でした。

そりゃあ、誰だってはてなと思うでしょう——突然、学校に行きたいなんて言い出したら。もちろん、これは学校に通って勉強したいとか、そのような意味ではなく、単に、わたしが通っていた小学校へ行きたいというだけのことです。母校、とも言えますか。

問題は、場所です——ここから歩いていくには遠すぎます。わたし一人では、到底行き着けません。

「せめて、電車に乗りませんか」

「ん？ 自転車は駄目かい？」

「阿良々木さんと二人乗りはしたくありません」

「そうか……。じゃあ、電車で行くとして。……で、その学校の名前は何ていうんだ？」

わたしが名前を言いますと、阿良々木さんは首を傾げました。が、地図で調べるよ、まあなんとかなるだろ、と笑って言いました。それから。

阿良々木さんはシャワーを浴びて、当たり前のようにわたしの小学校を調べ始めました。場所はもちろん、今もなお残っていることを確認できて、わたしはほっとしました。最悪の場合——学校がなかった場合でも、わたしにとっては実は大した問題ではなかったりするのですが。

わたしの蓄積されていく記憶がどうこうといったことではなく。

「その小学校、電車で片道三十分くらいだけど、どうする、今から行くか？」

「え？ 駅なんてこの町にあったのですか？」

「あるよ！ あるってことにしようよ！」

おら、行くぞ。そう彼は言います。

「……よ、よろしいのですか？」

「何言ってるんだ、当たり前だろ」

急かすように言う阿良々木さんに、やっぱりわたしは申し訳なく  
思つて。

顔を伏せて、言いました。

「……すみませんです」

「すみません？」

「いえ、あの、すみませんというのは英語でいう『エクスキューズ  
ミー』、申し訳ないという意味ではなく『サンキュー』、ありがと  
うございますといった意味で使つたのであつて決して謝つたわけ  
はありません」

「んん、そうか」

「ふと思つたのですがアライトさん」

「確かに突然思いついたときにはアライトという英語を使用するの  
は間違いではないが、しかし八九寺、残念ながら僕の名前は阿良々  
木だ」

「失礼。噛みました」

「違う、わざとだ……」

「噛みまみた」

「わざとじゃないっ!？」

「秋が来た」

「確かにもうすぐ二学期だけどさあ！」

「いや、阿良々木さん。日本人は謝つてばかりだと他国からいろい  
ろ言われておりますが、それでも『すみません』という日本語は多  
義語でして、謝罪の時以外にも使用するものではありませんか？」

むしろ日本人は感謝してばかりなのだと思いますが」

「途中まではもつともだと頷いていたけれど、でも感謝してばかりだというのはいまいちだな」

「すみませんです」

「今のはどの意味だ!？」

「はあ、分かりにくくてすみません」

「あー、分かんねえよ!」

「阿良々木さん、そうこんがらがらないでくださいよ」

「お前がこんがらがってるぞ!？」

「日本語というのは一見難しそうで単純なものだというのはいつだったか証明して見せましたよね。一見二ヒルそうでロリコンな阿良々木さんのように」

「やめろ、なんだか同列にされた日本語が可哀想だ」

服を着替え、準備を整えたらしい阿良々木さんは、「よし」と呟きました。

「八九寺、お前、そのリュックは置いていけば? 重いだろうし、いや、もし要るんだったら僕が持つし」

「それでは、お言葉に甘えて。ここに置いておきますね——何もとったりしないで下さいよ?」

「なんだその怖い顔は。ちょっとびびったぜ」

「チキンな阿良々木さんには脅しがぴったりかと思ひまして」

「小学生に舐められてる!」

「いつも舐められてるお返しです」

舐めるというのは、まあ、違う意味で。

それでも阿良々木さんを尊敬している人というのは、結構多く、妹さんはもちろん、神原さんかんはらや千石さんせんごくの、阿良々木さんに対するリスペクト度は並々ならないのです。

「そっぴや、千石の奴」

駅に向かい、歩きながら阿良々木さんは口を開きました。

「なんですか。またぞろ自分を尊敬してくれる人たちの自慢ですか。はあ、つまらない男ですねえ」

「そこまで言われるようなことを僕は言ったか!？」

「千石さんとは俗物語において仲良くなった関係ではありませんが、ほら、本編においてはまだ会っていない設定ですし」

「お前が語り部だと必ずそういうのが入って面倒なこと極まりないな」

「わたしにしては、色々我慢しているほうですよ？」

「僕はさ、羽川に語り部の座を乗っ取られたときでさえショックだったのにさ、まさか八九寺にまでその座を奪われるとは……」

「女子視点のほうを書きやすい人だっているのですよ」

「誰の話だ!？」

わたしは上手に進行しているはずですよ。

進行しているのは、阿良々木さんの変態度かもしれませんが。

「ん？ 変な態度なんて僕は取っていないぜ。いつもお前と話すときは、ばっちり胸を見ているつもりだ」

「目を見て話すというのみなかなか引きますが、そのお言葉が本当だとしたら、もうわたしは一人で学校へ向かいますよ」

「いやいや。お前一人じゃ絶対に迷うじゃん」

「いえいえ。わたしは迷ったことなど生まれてこの方一度もございませんよ」

死んでからはずっと迷っていましたか……。

あれ？ なんだか生前の記憶が少し曖昧ですね……。

「で、千石の話なんだが」

「それほどうたい話なのですな」

いいでしょう、聞いてあげますよ。

「こないだ、あいつとプールに行ったんだが、」

「ああ、そういえば約束していたそうですねえ」

「その帰り、一緒に写真を撮ろうと千石は言い出してだな」

「ほほう」

「だが迂闊なことに、あいつはカメラを忘れてきていた」

「……」

じゃあ提案しなければよいのでは……いや、これは。

「それで、やむを得ずプリクラ撮っちゃった」

「……」

「いやー、千石って可愛い奴でさあ。いっぱいハートマークとかつけちゃうんだよ」

「その時点で何もお気付きにならない阿良々木さんって重病です…」

「…」

「うん、よく分かってるつもりだ。プリクラと聞いてプリキュアに似ているからってだけで興奮するのは僕だけだって」

「ふたりはプリクラ!？」

「お、いいね八九寺。一緒に言ってみようぜ、せーの」

「言いませんよ」

「ち、変なところでノリ悪いな」

せーの、と聞きますとさらに千石さんが思い出されますねー。

まったく、あの人はあの人で大丈夫なんでしょうか？

「じゃあ次は神原の話なんだが」

「はあ」

「あいつのエロ度は半端ねえんだよ」

「阿良々木さんよりもですか？」

「そうだよ！ あのな、あいつは最近、ちまた巷とか精神とかいうワードを聞いただけで興奮するらしいぜ？」

「前者は何となく分かってしまいましたが、なぜまた精神」とすると阿良々木さん、得意の物真似を始めました。

「いや、聞いてくれ阿良々木先輩。精神という漢字をよく見るのだ。精の神だぞ？　いったいどんな神なのだ！」

「もう神原さんは精神という単語自体使用できませんね」  
「今ので意味が分かるお前もお前だな」

ただ適当に相槌を打っているだけかもしれませんがー？  
そしてなんでそれらをわたしに言っんですか。

「だってさー、戦場ヶ原に言ってもスルーだし、羽川に言っと『阿良々木くんの日頃の行いがそうさせてるのかもよ？』ってお説教食らうだろうし」

「その不愉快に上手い物真似はなんとかありませんか」

「失礼。神がかりました」

「わざとじゃないですっ!？」

しかもまた上手い。

むー。腹が立ちますねー。

と、そこに。

正面から、誰かがやってくるのが見えました——その人影を捉えて数秒も経たぬ間に、一陣の風が吹きぬけて。

「——？」

反射的に後ろを振り返ると、後方に、数メートルほど後方に、一人の女子がこちらを向いて立っていました。

さながら静止画像のように。

彼女は、わたし達、もしくは阿良々木さんを見て、両手を挙げ、両手両膝を地に付け、そして頭も地面に付け、平伏するような格好になったかと思いきや、立ち上がって一歩進み、両手を挙げわけの分からない動作をして、また平伏し、それを繰り返すのでした。

「道端で五体投置はやめる神原！ ていうかどこでもすんな！」  
ダッシュで彼女、神原駿河さん<sup>するが</sup>を止めに走る阿良々木さん。  
うわー、痛いですねー。

駆けつけた阿良々木さんに気付いた神原さんは、がっくりと地に倒れ、そしてなんとぼろぼろ涙を流していました。

「申し訳ない阿良々木先輩……」

「いや、謝らなくてもいいんだけど、……えっと？」

しどろもどろになってしまっている阿良々木さん。

この場合はしどろもどろの方が面白いですかね？

一方の神原さんは、マジ泣きでした。本人には珍しく半袖に下はジャージ姿で（学校のでしょうか？）、剥き出しの腕で涙を拭<sup>ぬぐ</sup>うばかりで、一向に立ち上がろうとしません。

先ほどからまったくその行動の意図が分かりません。

「うう、阿良々木先輩、はらひせんはい……」

「噛むな、キヤラ被ってんぞ」

「誰のことか分からないが、しかし、私はそんなことよりもっ！」  
がっ、と痛々しい音がして、見れば神原さんは頭を再び地に付けていました。

土下座の形でした。

もちろん、ここは道路なんですけど……。

「あああ……あろうことか阿良々木先輩を無視してしまった……。たかがBＬ小説を買いに浮き足立っていただけのことなのに……！」

ああ。そういうことでしたか。

尊敬する先輩を無視して走り去ろうとした自分を悔やんでいるのですね……律儀といえますか——でも行き過ぎな気がします。

「いいよ神原、そんなことは」

「そんなことではない！ 阿良々木先輩を無視だと、シカトだと！  
？ これは私のアイデンティティに反し、スポーツ精神にも則<sup>のっと</sup>っていない！」

「お前にとつて僕ってどんだけ……」

言いかけて、やめる阿良々木さん。突っ込む気力も失せたのか、  
まずは神原さんを立ち上げらせようと引っ張ります。が、彼女は動きません。

男子高校生の握力にびくともしませんね……。

「それにシカトしてねえじゃん。こうして話してるし」

「いや、しかし私は√二秒先輩を」

「細かいこと気にするな」

「土下座だ……裸で土下座だ……」

「それはどうかやめてくれと言いたい」

どんな罰ゲームだよ、と言いつつも神原さんを立たせることができません。

「おい、立てよ神原。僕は怒っちゃいねえよ」

「そうか？ こんな私をか？」

「もちろんだ。むしろそんな泣き顔でもキャラを貫き通すお前が僕は大好きだよ。さあ立て、涙を拭け」

「まさか……こんなところで告白されるとは」

「お、泣き止んだ」

「阿良々木先輩がそう仰るのなら……喜んで私は立って見せよう――  
エッチな意味で」

「そういうのはいけないけど、どうやら復活したようだな」

ヴァルハラコンビ構成員の神原駿河さんはようやくすくと立ち上がり、赤い目を（アニメ版ではそうでしたが、目の色という意味

合いではなく）こすりました。その動作は可愛らしい女子ですが。

「まったく、五体倒地だの土下座だの、やることやることおかしいだろ」

「いや、やっちゃうのは別に悪いことではないと思うぞ、相手に対する素直な気持ちだ」

「そういう話をしてるんじゃないかってだな」

「それでは何の話をしているのだ」

「お前の話をしてるんだ」

うーん、まるでわたしを忘れたかのようにしゃべり続ける阿良々木さん。

エロで百合でマゾでロリであると聞いている神原さんには、どうやらわたしが目に入っていない——見えていないようです。これは救われたと言っているいいでしょう。

でもやっぱり、少し寂しいですね……。

私はふと、神原さんが五体倒地した際に放ったどこかの店のビニール袋に気づき、そつと阿良々木さんの服の袖を引っ張りました。阿良々木さんはそれを拾い上げて神原さんの手に押し付けました——何といたしますか、胸に押し付ける感じで。

「ん、——神原、これ……」

「レディの購入物を許可なく見るところ、たとえ阿良々木先輩とはいえ許せないところはあるが、まあこれは見られても構わない物だからまあよしとしよう……ああ、それは包帯とガムテープだぞ」

はあ、なるほど。これは神原さんが今もなお身体に有している怪異——その左腕をカモフラージュするためのものなのでしょう。どれだけ包帯を交換しているのか……想像もできませんが。

で、ガムテープ、は……よくわかりません。

変なことに使っていなかったらいいんですけれど。

阿良々木さんもそこはスルーしたようで、違う質問をしました。

「それで神原、お前、今から書店ってことなんだよな？」

「その通り、流石阿良々木先輩だ。私なぞのすることなすこと、何でもお見通しなのだから。む？ お見通し？ 何だか心も身体も透けて見られているような気がするな！」

「お前はもう末期だ」

「いいや、私は思春期だ」

「どんな春よ」

「青い春だ」

「いやもう青じゃねえだろ……」

「いやいや。blueと英語で表記すると、B L っぽくてよいではないか」

「よくねえ、ぜんっぜんよくねえ」

「ああ、そうだ。B L 小説を買いに行かなくては」

「……一応優先順位ははっきりしてるみたいだな」  
確かに。

「氣遣いがまったくありません。褒舌ほうぜつなのに失礼です。軽くストレスチをしてまたも走り出そうとする神原さんを見て、わたしは思わずため息をついてしまいました。」

「ん？」

反応する神原さん。

「今、どこかで可愛らしい女の子の吐息の音が……」  
ざわーっ。

もの凄い勢いで鳥肌が立つ。身の危険を感じた、とも言えます。慌てて阿良々木さんが誤魔化してくれました。

「お前は実はナルシストなんじゃないか、自分の吐息を可愛いと称するとは」

「んー、私のブレスだった憶えはないのだが」

「ブレス言うな」

「ブレスレット、ブレスレット」

「そうだ、お前は落ち着け」

まるで兄弟の意思疎通のような会話がなされたあと、神原さんは目にも止まらぬ速さで走り去っていきました。

## まよいメモリー 其の玖（後書き）

今年が終わると同時、もうそろそろでこのお話も終了です。傾物語も読まなくては……。

## まよいメモリー 其の拾（前書き）

あけましておめでとうございます。

今後の更新についてですが、活動報告を見ていただければ幸いです。  
我が老兵（Windows x x）が危つい…

## まよいメモリー 其の拾

010

「阿良々木さんって、誰に対しても優しいんですね」  
嫌味のように口にした、その言葉は。

一体阿良々木さんにはどう聞こえたでしょう。

駅に到着したわたし達は、切符を買って。

と、そこで新たな問題にぶつかりました。

わたし自身、忘れていたことですが……幽霊が、切符を買い取るのかということ。そもそも、わたしの持っているお金は、あくまで幽霊の私物なので、使えるわけがありません。それに、切符を買ったところで、駅員さんにわたしが見えなかった場合、浮遊した切符が勝手に改札口へ入っていくという怪奇現象が起きるわけで。

……とまあ大袈裟に説明しましたが、結局どうしたかという話は簡単で。

わたしは切符を通さず、阿良々木さんのあとについて、改札口を通ったのでした。

駅員さんが止めなかったのも、やはりわたしは見えなかったよう  
で。

それでも、手にはしっかりと切符を持っていました――

「いいのですか、阿良々木さん」

「何が？」

「いや、買っても意味はないでしょう、切符」

わざわざ買ってくださるなんて。

「ああ――まあ、これは何と言うか、僕のプライドみたいなもので

ちゃんと運賃は払わせたいんだよな、幽霊だろうと」

「ケチみたいに聞こえます」

電車が来るまではもうしばらくかかりそうで——人目を気にせず、わたしたちは会話します。

やっぱり。

お礼の言葉は言えなくて。ちょっとツンケンした物言いになってしまった、「阿良々木さんって、誰に対してもお優しいんですね」

阿良々木さんは驚いたような顔をしてわたしを見て、目を見て。

「そうか？」

相手もそっけなく返してきました。

「ええ、そうです」

続いてわたしが、たいしてどう返すか決めていないのに言ってしまい。やむを得ず、続けます。

「戦場ヶ原さん、千石さんに羽川さん。それに先ほどお会いした神原さん、妹さん方を見ていれば誰しも思いますよ。ああ、そして忍さんも——怪異にも、です」

誰にでも平等で。

そんな人が、果たしているのかというほどの人物が、わたしのすぐ隣にいて。

当たり前のような顔をして、わたしを、わたし達を助ける。

「大体、おかしい話ですよ。あなたを冗談抜きで殺そうとした忍さんや神原さんやブラック羽川さん、いえ、戦場ヶ原さんもこの際含まれますね、そんな方々と普通にお付き合いできる阿良々木さんは、正直言って化け物ですよ」

「化け物か」

「ええ、そうです」

同じ台詞を繰り返すわたし。

「要するにわたしが言いたいのは、阿良々木さんはとてつもない化け物だということです」

「あれ？　なんか結論がとんでもないところに着地してねえか？　つか、全然違うこと言ってるねえ？」

ここは無視。我ながら酷いものです。

ちょうど電車が来たので、会話は打ち切りに。

車内でも、わたしたちは言葉を交わしませんでした。マナーがどうこうというのももちろんありますが、わたしが見えない方がもしいたら、それは不快な思いをさせるであろうと、自重したのです。

怪しい男子高校生が不快な笑みを浮かべる図。

誰だっ て見たくありませんよね、そんなの。

「おい八九寺。言葉には気をつけろよ」

「おやおや、別に阿良々木さんが痛い目で見られても良いと言うのなら、わたしはいくら雑談してもかまいませんによ？」

「によつて何だ」

「失礼。噛みました」

「いや、多分誤植だ……」

「噛みまみた」

「そりゃあわざとじゃないだろうが……」

「飽きがきた」

「噛むのにか！？　普通に噛むのに飽きちゃった!？」

「新たな噛み道を開拓するために、今は森林伐採中なのです——阿良々木という名の」

「キメ顔で言ってるそこ悪いけど、あんまりそれ決まってないからな」

「しかし阿良々木さんはよろしいのですか、痛い目で見られるなん

て」

「痛い目で見られるってのは、ちつとばかり快感があるぜ」

「……」

「いや、結構快感がある……かな？」

「そこは訂正しないで欲しかったです」

「まあ安心しろ八九寺。この世界には僕とお前しかいない。モブキヤラなんて存在するわけがないんだ」

「ああ、阿良々木さん。それは阿良々木さんが目の前の女の子に夢中で周囲の人が見えていないだけであって、別に誰もいないと言うわけではありませんよ」

「そうなの！？」

「はい、羽川さんが言っていました」

裏話ですが。

「そんな馬鹿な……じゃあさっきの神原のときも人がいたというのか」

「ええ、まあ」

だから痛いと言ったでしょう。

「畜生……迂闊な……モブはいないという僕の中の定義が崩れていく……」

「人がいないというのなら、それではそもそもどうやって電車は動くんですか」

「銀河鉄道999スリーナインみたく、人工頭脳で動いてんだぜ。会話だってできる」

「小学生でもそれが嘘であることくらいわかります」

「そう言えば、あの車掌さんの正体って知ってるか、八九寺」

「ええ、わたしは大概知っていますよ」

「知ってるんだ……じゃあ、ネタバレにならない程度に話すけどさ、彼の正体、テレビアニメ版では尺が足りなくて放映されなかった

らしいぜ」

「世知辛いお話ですよ」

「まったくだ。結局彼が風呂好きということしか判明しなかった」

「阿良々木さん、あなたもしかして劇場版しか見ていませんね」

「ばれた！」

「原作でもアニメでも、彼は無類の風呂嫌いだったはずですよ」

「無類のって……なんだ、そうなのか……しずちゃんと話が合うキヤラだと勝手に思っていたぜ」

「大きな顔して999を語るなど、一光年早いですよ」

「一光年は距離だからな」

結局わたし達は雑談をしてしまい。

一駅乗り過ごしたと言うハプニングはまあベタですが、それもあって。

わたし達は、小学校に辿り着きました。

ちなみに、切符はやはり通さず、わたしの手の中に握られていました。

「長い道のりだったな、八九寺……」

「ええ、あれからもう二年ですか」

「どんだけ迷ったんだ僕達！」

「阿良々木さんも髭まで生えてしまわれて……」

「生えてない生えてない！」

「わたしも片目に傷を負ってしまいましたし」

「ゾロ！？ お前そんなポジションにいちやいけねえよ、色んな意味で！」

「それよりも阿良々木さんがあのサンジポジションに例えられたことを純粹に喜ぶべきですよ」

「思わぬところに指摘が！」

突っ込みばかりして、喜ぶこともできないなんて。

「そう言えば、ゾロもサンジも泣かないんでしたね」

「ああ、お前もなんかヒントがずれてるが、そういう意味でも僕達  
はあんなキャラには到底及ばないというわけだ」

夏休みなので、もちろん生徒は誰もおらず。

職員室にはもしかしたら人がいたかもしれませんが、それでもわ  
たし達はこっそりと校内へ侵入しました。

「しかしすげーな……お前のガッコ、校門どころか教室に扉もない  
じゃん。まさにオープンじゃん」

「ええ。学校自体がひとつの教室、とかなんとか学校一話が長いお  
じい様がおっしゃっていました」

「どうしてそう婉曲に……いや、僕が今突っ込むべきことはそこじ  
ゃない」

「？ 学校に侵入していることがですか？」

「それも一理あるが、そうじゃなくって、これ盗難とかの被害ねえ  
のか？」

真面目な顔をして言う阿良々木さんに、わたしは心底あきれます。

「ちつつち、まったく駄目駄目ですねえ。何を馬鹿なことを喚い  
ているのですかこの高校生は」

「お前、慇懃無礼なんかじゃねえ、ただの生意気なガキだ」

「らめらめよ」

「わかる人にしかわからねえボカロネタを出すな」

「盗難だなんて、小学校に何を置いているんですか。小学生は置き  
ベンとかしませんし、財布だって携帯電話だって、そう持っていな  
いはずです。それに、鍵だのなんだの付けているから、盗難という  
のは余計起こりやすいのですよ」

「そうか……？ いや、でもほら、誰か酔狂な奴が、置きっぱにな  
っている体操着とかリコーダーとかを盗むかもしれん！」

「それ、阿良々木さんでしょう？」

「ぎくっ」

「ぎくって言いましたか今！？」

「いや、とにかくだな八九寺。僕はお前の身の上を案じて言ってい  
るんだぜ」

「いやあ。羽川さんのリコーダーを舐めたいなーとか、小学生レベ  
ルのことを考えていらっしやるような無粋な人に言われたくはあり  
ませんね」

「お前なぜそれを……」

「ええっ！？ 本当なんですかっ！？」

これはとんだ裏話を！

「いや……高校ではリコーダーの授業なんてないから、その、机を」  
無意識のうちに。

わたしは阿良々木さんを殴っていました。

ぐーで。

作者からの鉄槌とも言えますか。

「今度そんなことを抜かしたらその頭の上についているアンテナを  
抜きますよ」

「アンテナ言うな。しかもあれはアニメ版の演出でだな、」

「なめたマネしてると、その頭の上のアンテナむしり取るぞ！」

「キャラを変えんな！ しかもそれは鋼レンネタだ！」

「あー、もう！ 近寄らないでください！ 半径五光年以内には近  
づかないで下さいっ！」

「太陽系撤去を命じられた！？ つーか下手すりゃ銀河系にも住め  
ねえ！」

わたしは一人で騒いでいる阿良々木さんを置いて、懐かしいある

教室に入ります。

五年三組。

さすがに今はもう、違う教室になっているようですが……場所からして、ここで間違いありません。

そしてこの……最後尾の席が、わたしの席でした。

その机に触れて。昔——とは言っても、わたしの中ではいつだって昨日のことのような十数年前を思い出して。

何事もなければ、次の日に普通に通っていたであろう学校を肌で感じて。

「八九寺……？」

どの位黙っていたのでしょうか、いつの間にか隣にいた阿良々木さんが、心配そうに声をかけてきてくれました。

わたしはゆっくりと阿良々木さんの方を見て、笑いました。

「阿良々木さん。わたし、今日はお別れをしようと思ひまして」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1183p/>

---

迷物語

2011年4月4日21時55分発行